

基調講演

島嶼防衛・島嶼進攻作戦と海軍戦略

—太平洋戦争における日本の経験から—

香田 洋二

はじめに

我が国における最近の島嶼防衛への関心の高まりの背景として、近年のアジア地域における島嶼問題の顕在化及び当地域各国における海洋安全保障に関する問題意識の高まりがあったことは言うまでもありません。この地域は、ユーラシア大陸を背にして南と東には南シナ海及び太平洋、更に西方に広がるインド洋という広大な海域と、そこに所在する多くの島嶼国家により構成されています。この地政学的な特徴も考慮に入れながら、今日のメインテーマである「島嶼問題をめぐる外交と戦いの歴史的考察」の一つの側面である、日本が関係した「第二次世界大戦における太平洋の戦い」の大きな要素であった島嶼作戦について、その特徴、教訓そして、それらの今日的意義について、私の考えを述べたいと思います。なお私の講演では、この戦いを「太平洋戦争」と呼称します。また、太平洋戦争の島嶼作戦に加え、今日の代表例として1981年の英軍のフォークランド作戦及び日本ではあまり知られていない1983年の米軍のグレナダ作戦についても簡単に触れたいと思います。

概念規定

「我が国自体が約6,850の島から構成される国家である」という地政学的特徴そのものが我が国と島嶼防衛の関係を物語っています。今日の主題である太平洋戦争の島嶼作戦を考える時、この我が国固有の特徴に加え、当時の戦域であった太平洋から南シナ海そしてインド洋東部までの島嶼を含めた作戦を考える必要があります。この際、第一次世界大戦の結果、我が国が国際連盟の委任統治領として管理したカロリン・マーシャル両諸島及び米国領であったグアム島を除くマリアナ諸島からなる「日本委任統治領南洋群島」は太平洋戦争における日米の主戦場、それも島嶼をめぐる熾烈な戦いの場となったこともあり、本考察において特に注目しております。

本論に入る前に、私がお話しする内容のキーワードである「島嶼」及び「島嶼作戦・島嶼防衛」について、今日の私の論点に限った定義を申し上げます。太平洋戦争はその名称が

示すとおり、太平洋における航空作戦を併用した海上作戦と島嶼作戦が中心となりました。まず「島嶼」の定義ですがこれはニューギニア、ルソン、スマトラ、台湾等の特に大きな島ではなく、沖縄本島、グアム、サイパン島などを大きさの上限の目安とします。次に、島嶼作戦・島嶼防衛の意味するところは、「相手の抵抗戦闘を排除・無力化して上陸を試みる作戦とそれに対する防御作戦の両方であり」、相手が防備していない、あるいは防備が極端に弱い島嶼への「無抵抗・無血進攻」はその対象としません。

以上の前提で、まず太平洋戦争における島嶼作戦を概観いたします。太平洋戦争では、緒戦期の日本軍のグアム島、ウェーキ島、更にはインド洋東部のアンダマン・ニコバル諸島などへの進攻から、中期のガダルカナル島及びソロモン諸島作戦並びにアリューシャン諸島攻防戦を経て、戦争後期のギルバート・マーシャル諸島をはじめとする中部太平洋諸島や沖縄等に対する米軍の反攻まで、多数の島嶼戦闘が生起し、その多くは極めて熾烈な戦いとなりました。

大激戦となったタラワ攻防戦とともに我が国の島嶼作戦に大きな足跡を残した一例が、マリアナ沖海戦に敗れた聯合艦隊が西太平洋における制海・制空権を喪失した後の昭和 19 年（1944 年）9 月に生起した「ペリリュー島防衛戦」であります。勿論、我々は米軍から見た本作戦に関する歴史を承知しておりますが、この戦闘を日本側から見ると次の様に要約されます。在ペリリュー島の陸軍歩兵第 2 聯隊（水戸：中川州男陸軍大佐）基幹の陸海軍守備隊（戦闘員：約 6 千人）は、圧倒的な戦力をもって進攻してきたガダルカナル島以来歴戦の米第 1 海兵師団（約 2 万 4 千人）と歴史に残る激戦を戦い、同師団を撃退しました。しかし、制海・制空権なき同島への増援と補給は途絶しており、それまでの防衛戦闘で備蓄を消耗したうえ、連続した戦闘で被った累積損害により満身創痕となっていた日本軍守備隊は、第 1 海兵師団と交代した米陸軍 81 歩兵師団（約 2 万人）との間に最後の激戦を展開し、奮戦空しく全滅しました。

このように、太平洋戦争においては中部太平洋、ソロモン諸島からインド洋東部に至るあらゆる海域で島嶼をめぐる戦いが生起しております。この様な先人が大きな犠牲を払って戦った過去の事例から最大限の教訓を導き出し、それを今日の環境に応用・適用して万全の体制を構築することにより島嶼に対する相手の進攻を防止し、抑止することが我々国防に任ずるものに課せられた責務であります。この観点から本フォーラムは、この命題を検討する最適の場であることも明白であります。以下今日のメインテーマである島嶼作戦について私が考えるところを具体的に述べてゆきます。

太平洋戦争における島嶼作戦

日本陸海軍が関係した前大戦における島嶼作戦を整理すると次のように大別されます。

○ 緒戦期の我が進攻作戦

これは、開戦劈頭のグアム、ウェーキ島に対する日本軍の攻略作戦ですが、両者は対照的な経過をたどっており、その特徴は次の通り要約されます。

● グアム島攻略

彼我の海上・航空戦力：

圧倒的な日本の優勢

海空戦の推移：

本格的な海空戦は生起せず

地上戦力：

進攻側の日本軍が優勢、米軍増援兵力の投入なし

戦闘概要：

米軍守備兵力を過大に見積もった日本軍は、海軍陸戦隊（陸戦隊）に陸軍兵力を加えた十分な兵力をもって同島を攻略し1日で作戦終了=ほぼ無血占領

特徴・問題点等：

米国のグアム防衛方針（「同島の確実な防衛は困難なため、最終的には放棄」）及び米軍のグアム島防衛兵力の見積もり誤りという情報収集・分析能力の貧弱さを露呈

これに対する反省と是正措置なし=日本軍に共通する致命的問題点・欠点として終戦まで放置

● ウェーキ島攻略

彼我の海上・航空戦力：

局地的には日本軍が優勢

周辺海域には有力な米海軍空母機動部隊が存在

海空戦の推移：

日本基地航空部隊による事前攻撃とこれに対する米戦闘機による迎撃及び日本攻略部隊艦船に対する攻撃

地上戦力：

彼我拮抗=日本側は陸戦隊2個中隊6百人、米側も海兵隊守備隊約6百人

戦闘概要：

第 1 次攻略作戦— 航空攻撃の後上陸を試みた日本側は、外洋の波浪により作戦が難航するとともに、米陸上砲台の反撃と戦闘機による爆撃により大被害（駆逐艦 2 隻沈没）を被り、上陸を断念し撤退

第 2 次攻略作戦— 撤退して体制を立て直した日本軍は、10 日後にハワイ作戦から帰投中の空母 2 隻の航空支援を得て上陸作戦を実施、上陸後の米軍守備隊との戦闘は激戦となり一時こう着状態に陥ったものの、戦闘中に米軍指揮官を捕虜とした日本軍が米守備隊に戦闘停止を呼びかけてこれを実現し同島を占領

米軍の救援作戦— 米軍は空母機動部隊を基幹として救援を企図したものの、最終的にはワシントンの判断でこれを放棄（「海軍に見捨てられた」とする米海兵隊と海軍間に精神的軋轢が発生）

特徴・問題点等：

日本側の準備不足、特に敵兵力の過小見積もりと陸軍部隊を除外した過小な投入兵力が第 1 次攻略作戦の致命傷

開戦期の不首尾な作戦であったが、順調な他攻略作戦の陰に隠され教訓の抽出と以後への真摯な適用なし=日本軍の体質的欠陥として終戦まで継続

母船（輸送船）から上陸用舟艇 [大発動艇（大発）] への洋上移動要領等を含む不十分なハード・ソフト両面の問題を露呈=改善措置の大幅な遅延

結果的に、日本軍の敵前上陸作戦能力の不足・欠落を暴露
米側の僅か 4 機の残存戦闘機による防御戦闘への高い貢献
（現場での手作り爆撃装置を含む）

○ ガダルカナル島／ソロモン諸島型：

彼我同等の海空戦力による流動的制海権・制空権下の海上戦闘・陸上戦闘

彼我の海上・航空戦力：

伯仲

海空戦の推移：

増援・補給態勢確立のための制海・制空権をめぐる長期消耗戦

ガダルカナル島 = 6 ヶ月（1942. 8 ~ 1943. 2）

ソロモン諸島 = 1 年（1943. 2 ~ 1944. 2）

地上戦力:

米軍が優勢なるも、日米相互に増援兵力を投入、補給路を確保した米軍が優越した戦力を確立

戦闘概要:

海空消耗戦を優勢に進めた米軍が順次／漸時に制海・制空権を確保して、後方支援海上交通路を確立・維持

後方支援体制を確立した米軍が地上戦闘の主導権を獲得

消耗戦・補給戦に敗れた日本軍の後方支援体制が崩壊し、地上戦が困難となり撤退

同様の経過を経て米軍はソロモン諸島の各諸島を攻略北上してラバウルに肉薄

1年半にわたる本地域の島嶼作戦による消耗は日本海軍に回復不能の損害

特徴・問題点等:

日本軍が最も避けるべき消耗戦に引き込まれ、1組しか保有しなかった対米決戦兵力、特に海軍航空戦力のほとんどを喪失

ガダルカナル島：日本側から見た場合、策源地から遠すぎた戦場

流動的制空権・制海権下の戦いのモデル=いずれか一方の圧倒的優勢維持は困難

相互支援が困難な島嶼に対する後方支援の重要性=後方支援路の確保を巡る戦い

科学技術（レーダー、CIC等）と対日航空・海上戦術を融合した米軍の勝利

○ ギルバート諸島／マーシャル諸島型:

進攻側が作戦開始当初に制海権・制空権を確保して攻略を開始

防御側は航空・潜水艦による阻止作戦と孤立した地上兵力による抵抗作戦を実施

彼我の海上・航空戦力:

米軍が優勢（空母機動部隊+上陸支援／攻略部隊）

日本軍は劣勢=限定的反撃力（基地航空隊+潜水艦）

海空戦の推移:

米軍が進攻当初に制海・制空権を獲得、攻略作戦を実施し島嶼を占領、日本軍は制海・制空権を喪失し増援が困難となり各島孤立した作戦

地上戦力:

米軍が圧倒的に優勢

戦闘概要:

進攻当初に制海・制空権を獲得した米軍主導の戦闘

日本軍守備隊の奮戦により米軍の進攻は遅延するも、米軍は孤立した島々を各個

攻略

各島嶼に展開する日本軍に防備体制再建の余裕を与えない米軍の連続進攻
制海・制空権喪失と連続進攻により日本側は多数の島嶼を短期間に喪失
作戦継続期間はギルバート・マーシャル両諸島合計で約 3 ヶ月

両諸島喪失の結果、日本にとって最後の砦であるマリアナ諸島を米軍に直接暴露

特徴・問題点等:

ガダルカナル・ソロモンの戦いで戦力、特に航空戦力と駆逐艦戦力を消耗した日本
海軍の海上作戦による組織的抵抗は不徹底・不発

作戦可能な残存航空部隊の投入と潜水艦作戦により米軍の進攻阻止を企図するも
完敗、既に弱体化著しかった海軍航空兵力はさらに衰弱、潜水艦兵力も大幅に減勢
し以後の作戦に大きく影響

米軍は新型空母群及び搭載新型航空機による新戦略・新航空作戦要領・新戦術を
テストして教訓を摘出、不具合点を徹底的に是正した以後の中部太平洋からフィリピン・
沖縄における島嶼作戦の原型を完成

○ ミッドウェイ島／マリアナ諸島型:

島嶼攻略作戦と並行した艦隊決戦

彼我の海上・航空戦力:

主力空母機動部隊基幹

進攻側は強力な攻略・支援部隊を随伴

海空戦の推移:

双方全力の空母航空戦及び基地航空部隊による進攻部隊の迎撃

地上戦力:

ミッドウェイ攻略時は進攻側（日本軍）がやや優勢

マリアナ攻略は量的にはほぼ互角

戦闘概要:

空母航空戦の結果が以後の作戦の推移を左右

ミッドウェイ作戦— ミッドウェイ海戦に敗れた日本軍が攻略意図を放棄し撤退
太平洋戦争のターニングポイント

マリアナ諸島作戦— マリアナ沖海戦に勝利した米軍が制海・制空権を確立し
て同諸島に対する攻略を開始し日本軍守備隊が孤立、米軍
は孤立した島嶼における地上戦を有利に進め島嶼を占領

太平洋戦争の事実上最後の艦隊航空戦、以後米軍は実

質的に太平洋を支配

特徴・問題点等:

海上部隊（空母機動部隊）同士の戦いの結果が全てを支配

ミッドウェイ海戦で空母4隻を喪失した日本海軍であったが、空母艦載機搭乗員の大多数は生存(搭乗員戦死者約100人/作戦参加搭乗員約700人)し以後のソロモン、中部太平洋諸島の航空作戦に参加、

(ガダルカナル・ソロモン諸島の熾烈な航空作戦において大量消耗して日本海軍の人的航空戦力は事実上消滅)

ミッドウェイ島は太平洋の中間地点として米軍の作戦に大きく寄与、特に潜水艦による対日通商破壊作戦における中間補給基地として貴重な貢献

空母建造能力からみると、ミッドウェイ海戦以降終戦までの本格的空母戦闘に参加した日本海軍の新造正規空母は「大鳳」1隻であり、戦闘では補完し得ない次元の日本の工業力の致命的格差が露見

マリアナ沖海戦において日本海軍の空母戦力が実質的に崩壊し、以後、米軍に伍する組織的な海上作戦の遂行能力喪失

マリアナ諸島は戦争末期の対日戦略爆撃基地としての大きな意義

○ 硫黄島／沖縄型:

実質的に防御側が海空の組織的抵抗力を喪失した戦略・戦術環境下の島嶼作戦

彼我の海上航空戦力:

米軍が圧倒的に優勢

海空戦の推移:

進攻時点で米軍はすでに制海・制空権を確立

地上戦闘力:

米軍優勢

戦闘概要:

米軍が攻略開始時点で作戦の自由度と主導権を維持

日本軍は限定的な反撃、最終手段としての特別攻撃の常態化

進攻遅延を目的とした日本側の海・空戦闘と地上戦闘に一定の効果は認められたものの、最終的には孤立した島嶼防衛日本軍の敗北

特徴・問題点等:

物理的な抵抗力を失った日本軍最後の抵抗戦

「米軍に一撃を加えた後の和平の実現」という日本側の終戦構想への寄与無し

特別攻撃の日常化（もはや「特別」にあらず）

戦闘員の「勇気」とは別の次元の日本側リーダーシップの退廃

○ 特異な事例：昭和 17 年 8 月の米軍のマキン島奇襲掃討（第 1 次マキン島攻防戦）

この作戦は、昭和 17 年（1942 年）年 6 月のミッドウェイ海戦には敗れたものの中部太平洋全域が日本海軍の制海・制空権下にあった当時、米海軍と海兵隊が実施した島嶼奇襲作戦です。米海軍潜水艦 2 隻に分乗した海兵隊襲撃大隊（2 百人強）が全く日本軍に探知されることなく日本軍支配下のマキン島沖まで潜航進出し、同年 8 月 17 日未明、隠密裏に浮上、襲撃部隊がボートに分乗して奇襲上陸し、日本軍守備隊と交戦しつつ島内を掃討し、翌日潜水艦に帰還・撤収したものです。上陸後の島内陸上戦闘は双方とも相当の不手際があり地上戦闘の評価は「引き分け」、また米軍の作戦目的であった「同島急襲による開始直後のガダルカナルの戦いに対する日本軍の注意の混乱・分散」の達成にも疑問が残るところです。しかし、米軍は「潜水艦を活用した同島に対する奇襲攻撃と島内の掃討」という戦術目的の達成には成功したと言えます。

また、本奇襲作戦の副次的効果として、当該方面に対する日本軍防備体制の飛躍的強化があります。本奇襲作戦によりギルバート・マーシャル諸島方面の防備体制に大きな不安をもった日本軍は、急遽防備体制の再構築に着手しました。このことが、昭和 18 年（1943 年）年 11 月のギルバート諸島タラワ環礁のベティオ島における壮絶な攻防戦（一般には「タラワ島攻防戦」）の伏線となったといえます。この観点からは、第 1 次マキン島攻防戦の結果は、日本側にとっては極めて不首尾な結果に終わった戦いですが、その戦訓の真摯な抽出とそれを事後の作戦へ適用した、日本軍の数少ない事例ともいえます。

この 1 年 3 か月後に生じたタラワ防衛戦においてギルバート諸島の防衛指揮官として、進攻米軍に対する防衛作戦の指揮を執り、この戦闘を見事に戦いぬいて戦死した日本海軍第 3 特別根拠地隊司令官柴崎恵次少将は、再構築された同島の防衛態勢をして「たとえ、百万の敵をもってしても、この島をぬくこと（注：攻略・占領すること）は不可能であろう」と述べたとされています。現実には 1 個連隊規模の陸戦隊約 7 百名からなる守備隊〔他に約 2 千 5 百人の航空基地設営隊が所在〕を攻撃した、約 2 万名の米第 2 海兵師団の被った被害は甚大であり、結果的に米軍が払った物理的損害は事前見積もりをはるかに上回るものでした。第 1 次マキン島奇襲という戦術的成功が、後のギルバート諸島攻略という戦略的作戦に必ずしも寄与しなかった例と言えます。

同時に中部太平洋における対日反抗の緒戦となったタラワ攻防戦における激戦の教訓は米海軍・海兵隊の上陸作戦戦術と装備の改良に対する大きな「きっかけ」にもなり、この改善措置が以後沖繩戦終了までの米軍の日本軍に対する両用作戦・島嶼進攻能力を著しく

高めたこともまた事実であります。

太平洋戦争終了後の島嶼作戦

○ フォークランド戦争 (1982 年—英・アルゼンチン軍)

1982 年 3 月のアルゼンチン側のサウス・ジョージア島進攻により開始されたフォークランド戦争は兵力や戦闘の規模等が異なりますが、戦いの後半に英側が制海権を確立して守備隊を孤立させたという観点からはギルバート諸島／マーシャル諸島型に属するとも言えます。本戦争は緒戦期 (3 月末から 4 月上旬) のアルゼンチン軍のフォークランド島上陸と小規模な戦闘に引き続く同島の占領及び対英軍要撃準備期間、中期が 4 月 21 日からの英軍のサウス・ジョージア島奪回作戦 (ほぼ無血占領) 期間、後期が 5 月に開始された英空軍長距離爆撃機による爆撃及びこれに続く英軍の本格的進攻及びアルゼンチン軍の防衛作戦期間に 3 区分されます。アルゼンチン本土から約 5 百 km、同国内の直近空軍基地から約 8 百 km、英国の中間策源地であるアセンション諸島から 6 千 km 離れた小さな島嶼を巡る攻防戦は、両軍が準備を整えて同島周辺に展開した後生起した 5、6 両月の戦いが中心となることは当然であります。この地理的位置関係は太平洋戦争におけるガダルカナル島・ソロモン諸島型に相通ずるものであります。

アルゼンチンの空母、潜水艦までも投入した対英艦隊邀撃作戦が、同空母の機器故障のために中止されたことは、5 月 2 日の英原潜「コンカラー」によるアルゼンチン巡洋艦「ジェネラル・ヘルグラノー」の撃沈と相まって、アルゼンチン軍の海上作戦放棄に繋がり、結果的に英側が完全な同島周辺海域の制海権を確立し以後の島嶼作戦を著しく有利に進めることになりました。ただし、アルゼンチン軍の航空攻撃は継続され英国側は駆逐艦 2 隻、フリゲート艦 2 隻、大型の徴用航空機輸送コンテナ船 1 隻を失うとともに、中・小破数隻と、その被害はアルゼンチン側を大きく上回るものとなり、流動的な航空優勢の下での海上戦闘・島嶼戦闘の特徴が顕著な戦いとなりました。これもガダルカナル島・ソロモン諸島に類似と言えます。このなかでアルゼンチン空軍機が投下した通常爆弾の頻繁な不発事案は、同軍の実弾を使用した訓練、特に低高度実弾投下訓練の不足あるいは弾薬整備体制の不備のいずれによるものかは不明ですが、戦闘部隊としての致命的欠点をさらけ出したことになり、実戦経験がない、あるいは極めて少ない他国軍や自衛隊に対する大きな警鐘となったと考えます。また、アルゼンチン側の潜水艦活動は、当初の「サンルイス」の活動が大きく英艦隊の行動を制約したものの、4 月後半の「サンタフェ」の被弾・擱座・放棄以後は極めて消極的となり、潜水艦による英攻略部隊圧迫・牽制に至らなかったこと及びここで指摘した通常爆弾不発の続出の両点は、本戦争の教訓導出という観点から特に注目さ

れるべき点であります。

この戦争は、アルゼンチン側の制海権喪失による同島守備隊の孤立及び地上戦闘敗北による 6 月 14 日の首都ポートスタンレー防衛軍の降伏、翌 15 日のアルゼンチン大統領の「戦闘終結宣言」に続く、同 20 日の英軍によるサウス・サンドウィッチ島再占領と英国政府の「停戦宣言」をもって 72 日間で終結しました。

○ グレナダ進攻作戦 (1983 年—米)

軽防御の島嶼に対する今日的な進攻作戦の事例として 1983 年のカリブ海のグレナダ島に対する米軍の進攻作戦があります。本作戦の特徴は、ある程度の人口を有し、近代的な都市生活が営まれているものの軍事的には軽防御である島嶼に対する相当規模の侵攻能力を有する軍隊の進攻であり、今後、我が国・自衛隊が対象とする島嶼防衛との類似性が最も高い作戦でもあると考えます。

南米ベネズエラの北、カリブ海縁辺島嶼に位置する人口約 10 万人、面積 344km² の島嶼国家であるグレナダは、冷戦最盛期の 1983 年頃には革命政権による親ソ反米政策を推進しており、米国にとって同国の第二のキューバ化が懸念されていました。

(参考：石垣島 222km²、宮古島 159km²、与那国島 29km²)

本作戦は状況の悪化を憂慮した当時のレーガン政権が「軍事進攻によりグレナダ革命政権を倒し、同国の親ソ化を阻止するとともにカリブ海地域を安定化すること」を作戦目標として、米 4 軍による統合任務部隊を編成して同島を攻略したものです。

具体的には、米軍は「同島の治安環境悪化によりグレナダの大学に在学中の多数の米国人医学留学生の安全な生活が脅威にさらされている」という情勢認識の下、同学生救出を作戦目標として奇襲作戦を実施しました。この作戦では米第 2 艦隊司令官が統合任務部隊 (JTF) 指揮官、JTF 副指揮官兼地上部隊指揮官をシュワルツコフ陸軍少将 (当時、1990 年の第 1 次湾岸戦争の最高指揮官) が務めております。進攻部隊は陸軍第 82 空挺師団、レンジャー連隊、デルタフォース、海軍の SEALs、海兵隊 MEU 等、総兵力約 7 千名で編成され、海・空軍部隊の支援の下 1983 年 10 月 25 日にグレナダ軍部隊 (約 2 千名) を急襲し、空港、港湾、主要公共施設等を確保するとともに、作戦目標であった米人留学生を保護したことにより、実質的な作戦は数日間で完了しました。同国にはキューバ、ソ連、東独、北鮮の軍事顧問団が駐留していましたが、彼らは作戦地域外に移されて米軍の監視下に置かれ事態の拡大には至りませんでした。

以上がグレナダに対する米軍進攻作戦の概要ですが、本作戦からは、我が国の島嶼防衛における自衛隊独自及び日米共同の防衛体制の構築、本土からの増援体制の整備、島嶼部隊間の相互支援体制・要領の確立等、多くの実利的な戦訓が導かれるものと考えます。

勿論、外国による我が国に対する進攻形態がグレナダ作戦と全く同一になることはありませんが、当該事例の下には、今後の普遍的な課題である特殊部隊の急襲対処、(クルーズ)ミサイル防御、敵の第一撃に対する残存性の向上等、更に強化すべき事項、また奇襲に対する警戒態勢の構築等、更には比較的狭隘な島嶼に対する対象国の進攻兵力の見積もりや戦闘様相の予測等、多くの参考・教訓事項が埋もれていると思われます。他の同種事例研究も含め、自衛隊の積極的な取り組みが期待されるところであります。

事例とした島嶼戦闘の教訓と今日的意義

○ 全般

太平洋戦争及びその後の代表的な島嶼作戦から得られた最大の教訓は、やはり「敵の上陸を許さない」ということにつきます。特に、その前提となる制空権・制海権を確立できる航空及び海上兵力は十分に整備しなければならないことは言うまでもありません。日本軍の場合、地上戦闘を優勢に戦いながらも、制海・制空権を喪失していたため結果的に補給戦に敗れ島嶼防衛に失敗した例が数多くあります。要するに島嶼防衛の成否が制海・制空権と密接に関係していることは論を待ちません。同時に、抑止が失敗し敵の上陸を許した後の島嶼防衛においては地上戦闘の推移が作戦の最終的な成否を決することも当然で、前大戦における日本軍の経験は将来の自衛隊のみならず各国の島嶼防衛体制を構築するうえで、実戦経験のない我々に大きな教訓を残しています。

これらを総括しますと、島嶼防衛は

- ① 島嶼防衛の前提である制海・制空権の獲得維持能力
- ② 相手の侵攻意図を十分に抑止できる態勢
- ③ 実際の侵攻に際しては敵部隊を撃退し得る地上戦闘力

の三者のバランスの上に成り立つものであるということです。特に、進攻の抑止から、敵進攻後の増援と近隣島嶼配備部隊間の相互支援を可能とする態勢、あるいは相互支援が困難な場合の防御部隊の編制や戦術等の構築という観点も含め、制海権・制空権を維持する能力の保持と強力な防備地上兵力の配備は必須と考えられます。

○ 警戒監視体制の強化と奇襲対処能力(対特殊部隊戦闘を含む)の向上

次に、第1次マキン島攻防戦やフォークランド作戦、そしてグレナダ進攻作戦等から判断しますと、将来我々が対処しなければならない島嶼進攻の形態が、太平洋戦争において米軍が開発し完成させた上陸前攻撃(空爆+艦砲射撃)と敵前上陸を組み合わせた、敵の防御戦闘を正面突破する島嶼戦闘形態とは異なってきているということです。特に特殊部

隊等を投入した隠密・奇襲上陸あるいは特殊部隊の活動により守備隊をかく乱し戦闘力を低下させた後の進攻部隊の上着陸になる公算が高くなっているということです。特に、伝統的な島嶼進攻は、敵防備兵力の破壊と戦闘終了後の島嶼維持の確実性は高いものの、同時に彼我ともに大きな損害を出すことが一般的であり、今日的な作戦ではなくなりつつあります。言いかえれば、今日ではフセインのクウェート侵入を排除した第 1 次湾岸戦争の様な、被害を最小に留めつつ短期間で作戦目的を達成して戦闘を終結する「クリーンな戦い」を追求する傾向が強くなっていると考えられます。島嶼進攻能力を有する今日の主要国に共通の現象である特殊部隊の急速な強化は、明らかにこの傾向を裏付けているといえます。

防御側としてこの様な奇襲を抑止して万一に備える為には、空・水・潜に対する常統的な監視体制の確立と維持が必須であります。更に、戦略的価値の高い過疎地あるいは離島への対特殊部隊能力を付与された防備部隊の配備も避けて通ることができない情勢になっています。この様な奇襲、それも特殊部隊を投入した戦闘公算の増大は、今後の島嶼防衛計画担当者に明確な警鐘を鳴らしているといえます。

○ 適切な防御兵力の選択：日本海軍の潜水艦運用

日本海軍は太平洋戦争の島嶼作戦において、聯合艦隊の航空戦力の主力を消耗した後のギルバート諸島／マーシャル諸島防衛戦（昭和 18 年 11 月）から沖縄戦（昭和 20 年 6 月）まで、対米島嶼防衛作戦の切り札として多数の潜水艦を投入しました。その結果は海軍の期待に反して惨憺たるものとなり、僅かな戦果と引き換えに極めて多くの潜水艦を喪失し、結果的にこれら潜水艦作戦による日本軍の島嶼防衛作戦への寄与は実質的に「零」で終わりました。太平洋戦争を通じた日本海軍の作戦潜水艦の喪失数は、開戦から昭和 18 年（1943 年）3 月までは建造数 22 隻に対し喪失数は 19 隻であり、その時点での運用隻数は 64 隻と開戦時の水準である 61 隻を維持していました。昭和 18 年 3 月は実質的に敗北したガダルカナル島からの撤退が完了し、拡大した戦線の再整理にあっていた時期です。

これからわずか 7 ヶ月後の同年 11 月のギルバート諸島防衛戦における潜水艦 6 隻の喪失（投入隻数 9 隻：成果は米護衛空母 1 隻撃沈）に始まりマリアナ諸島防衛戦では投入隻数 29 隻中、戦果無しで 17 隻喪失、そしてフィリピン諸島防衛戦では 14 隻中 7 隻を喪失し、これまた戦果「ゼロ」という悲惨な結果となっています。昭和 18 年 3 月当時の潜水艦約 65 隻は昭和 19 年 10 月には約 35 隻にまで激減し、そのまま終戦に至りました。結果として太平洋戦争において日本海軍が建造・運用した潜水艦 156 隻中 127 隻の潜水艦と約 1 万 1 千人の「潜水艦乗り」を失う結果となりました。ガダルカナル作戦を終了し対米作戦を仕切り直した昭和 18 年 3 月以降、実に 100 隻以上の潜水艦を喪失したのです。喪失潜水艦の多くが米軍の進攻に対する島嶼防衛作戦におけるものでした。

聯合艦隊の航空戦力の消耗が激しく再建がままならなかった昭和18年後期から始まった米軍の反攻作戦へ対抗するには、投入可能な航空部隊の全力とともに潜水艦がその主役となることは、他の選択肢がない以上聯合艦隊の作戦としては「やむを得なかった」と考えます。しかし、正にこの時期に、「大西洋の戦い」におけるドイツUボートとの戦いの劣勢を盛り返して戦争の流れを反転させた米海軍は、Uボートとの戦いに勝利した最新装備と戦術を太平洋に持ち込んだにもかかわらず、日本海軍は全くこの情報を得ておりませんでした。それどころか、従来の日本海軍の戦術を無批判かつ愚直なまでに繰り返した結果が、上の数字で示される悲惨な損出に繋がったといえます。この背景には、日本海軍の情報能力の弱さもありますが、ギルバート防衛戦を境に急増した潜水艦喪失を深刻に受け止めず、単に「経験の浅い若手潜水艦長の積極性や攻撃精神の欠如」として片づけ、熾烈な米海軍の対潜攻撃からかろうじて生還した潜水艦長の戦訓報告や意見具申までも無視し、潜水艦大量喪失の原因を精緻に追及しなかった日本海軍の姿勢は致命的でした。特にマリアナ諸島の作戦においては開戦後1年4カ月の間に失った潜水艦19隻とほぼ同じ17隻を僅か3週間で失っているにもかかわらず、真剣な原因追求とその対策が取られなかったことは、日本海軍に範をとって創設された海自の元リーダーとして今日この場で指摘することに心が痛みますが、当時の海軍、聯合艦隊、潜水艦隊のリーダー達の感性の欠落であり、健全な責任感の弛緩と退廃であると言えます。このことは、今日海自そして各国海軍リーダーに対する大きくかつ強烈な精神面での教訓と言えます。

同じ潜水艦でもフォークランド戦争における英国とアルゼンチンのように、最適の運用をしてこそ真価が発揮でき、逆にこれを間違えると太平洋戦争における日本海軍の例が示すように、大きな悲劇になることを改めて確信されられた次第です。このことは何も潜水艦に留まるものではなく、航空兵力から特殊部隊まで、あらゆる兵種に適用されるべきものであり、戦略計画者・作戦立案者・戦術開発者から現場の戦闘指揮官にいたる各段階の当事者全ての、既成概念にとらわれない柔軟な発想が求められるところです。何人も「日本海軍が潜水艦戦において犯した過ち」を繰り返してはなりません。

○ 戦略・戦術及び装備の開発

日本海軍の戦略は太平洋を西進する米太平洋艦隊を太平洋中部から日本近海の水域において要撃撃滅する「漸減作戦」を中心に形作られていました。基本的には潜水艦と大型飛行艇の偵察による敵艦隊の位置と進撃方向の把握、引き続き潜水艦と陸上攻撃機による追加反復魚雷攻撃、その後の米艦隊の日本近海への接近後の巡洋艦・駆逐艦部隊による夜間魚雷攻撃、そして日米戦争の最終決着を目指した戦艦の主砲攻撃による敵艦隊の撃滅、という一連の戦闘の累積効果を期待したものでした。このため、日本海軍は、第1次

世界大戦においてもジュットランド海戦の様な主力艦同士の艦隊戦闘を中心に研究し、上陸側の艦隊及び支援・攻略部隊と防備側地上部隊の間の激戦の結果、上陸側が大失敗をした両用戦である「ガリポリ」作戦に対してはほとんど興味を示さず、かろうじてその教訓として「艦艇部隊は陸上砲台と戦闘をしてはならない」という教訓を導きました。それはそれなりに意味があると考えられますが、同時に第 1 次世界大戦の終戦処理として太平洋諸島を「委託統治領」として管理することになった日本としては、講和条約により同諸島の軍事利用が禁じられていたとはいえ、有事の際の同諸島の防衛に関する研究と計画作業まで後回しにすることは許されなかったのです。残念ながら、虎の子の対米決戦兵力である聯合艦隊を両用戦や島嶼作戦から隔離するための口実として「ガリポリ」作戦が使われた形跡さえ感じさせられます。

日本海軍は委託統治領となった同諸島を、対米漸減作戦の為の潜水艦及び航空機の戦時前進基地として活用する研究には熱心であったものの、同諸島の防衛に関する関心はほとんどなかったと言えます。その結果、両用作戦に関する研究も遅れ、その装備および戦術とも極めて不十分な状況で太平洋戦争に突入しました。緒戦の進撃期に続く長期の消耗戦となったガダルカナル島／ソロモン諸島の戦いにおいて初めて島嶼戦争の本質を理解した日本海軍は、急遽島嶼作戦用の装備と戦術の開発に着手しました。しかし、全てが後手に回り、その成果を得た時点は聯合艦隊の作戦能力が激減した昭和 19 年中期となり、本来の島嶼作戦を実施する時期は既に失っていたのです。その成果の中には 1 等、2 等輸送艦などの米海軍の LST 等より優れたアイデアに基づくものもありましたが、タイミングの遅れはいかんともしがたく、これまた我が国の島嶼防衛戦に対する寄与は極めて少なかったのが現実でした。本件も、今後の島嶼作戦を考える上で大きな示唆を与えるものと考えます。

まとめ

今日は太平洋戦争における我が国、特に日本海軍の失敗を通じて得た教訓分析とその今日的適用について考察してきました。その中で私が最も強調したい事は「人」の要素であり、既成事実や固定概念を排した柔軟な発想こそ、新たな時代への対応を可能とする原点であると言うことです。

明治 2 年 (1869 年) の建軍以来、日本の近代化をリードしてきた日本海軍でさえ、日露戦争を経た建軍 40 年を向えた頃から、官僚主義と前例主義及び柔軟な発想を排除する風潮が満ちはじめ、対米弱者としての机上計画としては満点と考えられる「漸減作戦」のみに海軍の全てを集中し、これから外れた、あるいは本構想の矛盾を指摘し、より実践的な構想を模索する新たな発想を、いつの日からか排除するようになったと見受けられます。

そのような中、日本海軍は海軍航空戦力の活用においては一時的にせよ世界をリードしました。しかし、その原点は依然として漸滅作戦に寄与する補助兵力として海軍航空を位置づけたものに留っておりました。この時期の海軍航空近代化を先頭に立って牽引してきた山本五十六連合艦隊司令長官自身の強いリーダーシップにより、漸滅作戦への寄与という「呪縛」からようやく解放された日本海軍は、空母機動部隊という海軍航空戦力の革新的運用を発想、具現し、太平洋戦争緒戦期には輝かしい成果を重ねたことは広く知られております。しかしガダルカナル島の戦闘終了以降、残念ですが日本、とりわけ日本海軍唯一の決戦兵力である聯合艦隊は、今日ここで申し上げた通りの戦争経過を辿り消滅しました。その背景、特に太平洋戦争における日本海軍の失敗の原因には色々なものがあることは勿論ですが、やはり「人」の要素が最大であったことを改めて指摘して今日の私の話を終えることとします。

